優れた授業実践のための７つの原則とその実践手法

中　井　俊　樹*
中　島　英　博**

<要　旨>

本稿では、米国で開発された「優れた授業実践のための７つの原則」の開発成果とこの原則を実現する実践手法の特徴を明らかにする。明らかにされたことは以下のようにまとめられる。

米国高等教育学会の研究グループを中心に開発された「優れた授業実践のための７つの原則」は、これまでの教授法研究の成果が教員にとって利用しやすい形でまとめられているため、全米の大学に広く普及している。対応する実践手法は各大学の現場レベルで多様化された形で蓄積されていることがウェブ上で確認される。また、各大学に蓄積されている実践手法を収集することによって、どのような授業においても実践できる学問分野に依存しない教授法が相当量存在し、７つのそれぞれの原則は実践手法を束ねる枠組みとしてバランスのとれた原則であることが確認される。さらに、実践手法には学生に対してメンターやアドバイザーとして接するような行動が含まれており、単なる知識伝達者としての狭義の教師像ではない広く学生の発達に関与する教師像が反映されていることがわかる。

１．はじめに

どのような教師の働きかけが大学生の学習を促進するのであろうか。この課題に対し、これまでに学会などにおいて大学教授法研究が積み重ねられ、大学生の学習成果の向上に影響を与える教授法が抽出されている。抽出された教授法は、ファカルティ・ディベロップメントなどの活動によっ

* 名古屋大学高等教育研究センター・助教授
**名古屋大学高等教育研究センター・助手

て大学教員の間で共有されつつある。しかし、個々の教授法を実現する具体的な実践手法については、多くの大学教授法の研究において対象に含まれておらず、具体的な実践手法は研究的視点から整理されていないのが現状である。

個々の教授法は、抽象性の高いものから具体性の高いものまでさまざまなレベルにあると見なせる。本稿では、図１のように「教授法の理論」と「実践手法」に二分化することによって、抽象度の異なる教授法の整理を試みる。例をあげると、「教員と学生のコミュニケーションは学習効果を高める」は教授法の理論であり、それを実現する「授業終了後、しばらく教室に残る」や「メーリングリストで授業内容に関連した情報を学生に送る」などは実践手法である。

近年、大学教育の現場で求められているものは、抽象性の高い「教授法の理論」以上に、それを実現する「実践手法」である[1)]。どのように授業を設計するのか、どのように学生とコミュニケーションをとるのか、どのように学生を評価するのかなどの具体的な実践手法が求められてきていると言える。

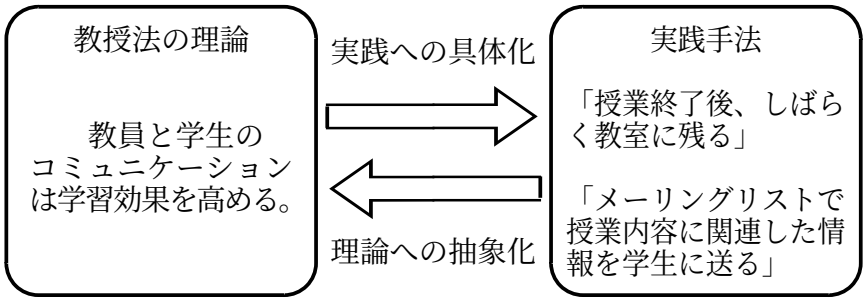

図１　教授法の理論と実践手法

国内においても授業改善のための実践的な手法に関する研究プロジェクトが見られるようになってきている。その一つは池田他(2001)による『成長するティップス先生』であり、これは大学教育における授業改善のための考え方や手法の提供を意図したものである。また、日本数学会(2000)は、「受講生が多い場合どうするか」、「欠席・遅刻をなくす方策」などの問題別解決策をまとめ、授業改善の手法の提供を試みている。

これらの試みは、全国の大学においてファカルティ・ディベロップメント活動が推進されるにつれ、一定の有効性が認められている[2)]。しかし、これらの試みにも次の２つの点で課題が残されていると見ることもでき

る。第一に、提供されている実践手法が十分な具体性を備えていないという点である。そのため、特に教育学を専門としない教員には、授業改善において何が重要であるかを理解するヒントにとどまり、どのように行動すれば授業改善に結びつくのかについて明示されていない場合が多い[3)]。第二に、提供されている実践手法が、必ずしも教授法の理論に基づいて構造化されていないという点である。そのため、授業改善においてどのような教授法の理論が重要なのかについて整理されていない。また、教授法の理論を具体化するための実践手法にどのようなものがあるのか、逆に具体的な実践手法はどのような理論に基づいているのかなどについて明確に示されていない。

米国における大学教授法研究においては、教授法の理論と実践手法という視点に基づいた研究が蓄積されている。その中心的な研究は、Chickering and Gamson（1987）による「優れた授業実践のための７つの原則」（以降、７つの原則）研究とそれに対応した実践手法研究である。「７つの原則」は、全米の多くの大学におけるFD活動に利用され、現場の大学教員の認知度が高い研究成果である。

本稿では、米国で開発された「７つの原則」とそれを具体化する実践手法の特徴を明らかにし、日本の大学における授業現場への適用可能性を検討するための素材を提供することを試みる。具体的には、「７つの原則」の開発とこれまでの成果を明らかにし、全米の大学等で蓄積されている「７つの原則」に基づく実践手法の抽出を行うことで、実践手法の特徴を明らかにすることを本稿の目的とする。

以下では、本稿の目的にそって次のような構成をとる。まず第２節では、「７つの原則」の開発とこれまでの成果を既存の文献からまとめる。第３節では、全米の大学で蓄積されている「７つの原則」に対応した実践手法を抽出しその特徴をまとめる。第４節では、本稿で明らかにされたことをまとめ、今後の課題を考察する。

２．「優れた授業実践のための７つの原則」の開発と成果

「７つの原則」は、1980年代後半から米国高等教育学会（American Association for Higher Education）の研究グループを中心に開発されたものである。この成果は、全米の大学関係者の間で最も認知度の高い教授法であり、現在でも全米をはじめ世界の多くの大学で活用されている。なぜ

これほどまでに「７つの原則」が普及しているかという背景は、関連するさまざまな文献から推測することができる。

ChickeringとGamsonを中心とする研究グループの問題意識は、学士課程教育の質的向上を効果的に促進するための方法論にあった。その解決方法として、彼らは以下のコンセプトから教授法の原則をまとめることを試みた。それは、(1)それまでの教授法研究の成果をふまえたもので、(2)誰でも覚えられるように５から９の原則に集約し、(3)原則が抽象的になりすぎないよう配慮し、実践的な例を束ねた枠組みとしてまとめることで、(4)教員をはじめ事務職員、大学執行部などすべての大学関係者に届くような形でまとめるというものである(Gamson, 1991, pp. 5—9)。

「７つの原則」の発表以前においても、大学における教育の質的向上に関する研究はさまざまな形で行なわれていた。しかしながら、それらの研究成果は多くの大学の教員が利用しやすい形でまとめられていなかった。このような状況の下で、研究グループは、教員をはじめ大学の構成員が実践可能なガイドラインの開発の必要性を感じていた。

優れた授業実践を実現するための基礎となるコンセプトは「学生を学習に巻き込むこと」(Involvement)であることは、Astin(1984)やFeldman(1997)などの研究成果が示している。研究グループはこのコンセプトを重視して、1987年に７つの原則にまとめ、表１のように現場の教員に示した(Chickering and Gamson, 1987)。

表１「優れた授業実践のための７つの原則」

1. 学生と教員のコンタクトを促す
2. 学生間で協力する機会を増やす
3. 能動的に学習させる手法を使う
4. 素早いフィードバックを与える
5. 学習に要する時間の大切さを強調する
6. 学生に高い期待を伝える
7. 多様な才能と学習方法を尊重する

研究グループは、これらの原則をどのように現場の教員に還元するかについてのコンセプトも持っていた。それは、(1)あらゆる学問分野の教員が利用可能なこと、(2)専門用語を使わないこと、(3)すべての教員が実践できるような行動として示すこと、(4)それらをすべての教員に届くよう

１つの原則につき１ページ程度でまとめて提供することである(Gamson, 1991, pp.7－10)。このようにして、教授法の原則とそれに対応する実践手法をわかりやすく示したことが、全米の多くの大学で受け入れられることとなった重要な要因の一つと言える[4)]。

３．７つの原則に対応した実践手法とその特徴

「７つの原則」の有効性などに関する研究は、研究論文の形で発表されている[5)]。しかしながら、実践手法自体の多くは、必ずしも研究論文という一般化された形ではなく、各大学の現場レベルで多様化された形で蓄積されている。このような実践手法の収集は困難である面もあるが、いくつかの大学では教育支援組織によって教員向け実践手法集として提供されている。本稿では、こうした機関レベルで提供されている実践手法に注目し、その収集を試みる。

実践手法の多くは、教員の利便性を考慮して現在ではウェブを通じて提供されている。ここでは、ウェブを通じて入手できる資料から、包括的にまとめられた10の資料(文末の資料１参照)を抜粋し、実践手法をまとめる。10の資料に限定したのは、「７つの原則」に対応した実践手法のサイトは膨大な量存在することと、選択した10の資料の実践手法で内容がおおむね網羅すると判断したためである。

まず、収集した資料にリストアップされた実践手法をすべて翻訳し、いくつかの資料で重複する手法を一つにまとめる。その上で、教員の行動として示すことができない抽象度の高いものを捨象して整理する。こうして、まとめられたものが表２の７つの教授法の原則に基づく実践手法である。

表２にまとめられた実践手法から次のようなことがわかる。第一に、どの学問分野の授業においても教員が実践できるような手法が相当量存在するということである。実践手法の収集プロセスにおいて、各大学において蓄積させた実践手法に重複はあったが、各大学の現場レベルで多様化された形で蓄積されていることが再確認された。始めにChickeringとGamsonが教員用チェックリストとしてまとめられた実践手法は、原則毎に10項目で合計70項目であった。しかし、各大学において蓄積されている実践手法は合計で239項目に達することがわかった。

第二に、各教授法の原則に対する実践手法の数にそれほど差がつかなかったことである。最も実践手法が多く抽出された原則は、「素早いフィー

ドバックを与える」の44個であり、一方最も実践手法が少なく抽出された原則は、「多様な才能と学習方法を尊重する」の27個である。７つの原則が実践手法を束ねる枠組みとしてバランスのよいものであることが確認された。

第三に、複数の原則に対応した実践手法があることである。たとえば、学生の自己紹介は、「学生と教員のコンタクトを促す」ための手法であり、同時に「学生間で協力する機会を増やす」ための手法である。同様に、オフィスアワーは、「学生と教員のコンタクトを促す」ための手法であり、同時に「素早いフィードバックを与える」ための手法である。このように１つの実践手法が複数の教授法の原則に対応する場合があることが確認された。

第四に、実践手法は教室内での教授法という範囲を超えたものが多数あるということである。たとえば、「学生と教員のコンタクトを促す」という教授法の原則の中には、「学生が主催するイベントに参加する」、「学生が他の教員とネットワークができる機会を与える」、「教室間を学生と一緒に歩く」など学生に対してメンターやアドバイザーとして接するような実践手法がある。このように単なる教室の中の知識伝達者としての狭義の教師像ではない広く学生の発達に関与する教師像が反映されている。

表２　７つの原則に基づく実践手法

１．学生と教員のコンタクトを促す

・学生が研究室に立ち寄ることをすすめる
・自分の過去の経験や考え方などを学生に話す
・その分野の就職情報やキャリア形成などのアドバイスをする
・学生が主催するイベントに参加する
・学生のカリキュラム外の活動や大学外の生活について知る
・授業開始２週間目までに学生の名前を覚える
・学生に非公式のアドバイザーとして接する
・学生に自分の領域の学会や研究会などに連れて行く
・学生がキャンパスで問題に巻き込まれたときには、解決にむけて助けにいく
・学生とeメールでコミュニケーションする
・初日の授業が始まる前に学生にウェルカムレターを送る
・授業の後で学生に個人的に話す
・学生をひとりの人間として接する
・学生にとって便利なオフィスアワーをつくる
・学生に自己紹介をさせる

・アイスブレイキングのテクニックを使う
・ユーモアをはさむ
・可動式の机や椅子を使って学生との距離を調節する
・試験が終わった後、フィードバックを与えるために研究室に来ることをすすめる
・学生のクラブ活動などの顧問になったり、観戦したりする
・クラス内外で社会的な交流を進める機会を設ける
・教室間を学生と一緒に歩く
・オープン・ドア・ポリシーを伝える
・家族の許可をとって、かけてよい時間帯を教えて、自宅の電話番号を伝える
・学生の課題に対して、個別のフィードバックを与える
・学生から情報を提供してもらう
・学生が他の教員とネットワークができる機会を与える
・他の教員の意見や研究内容を教える
・授業が終わった後に、すぐ帰らない
・授業についていけない学生や欠席の多い学生を知る
・自分と異なる文化をもった学生にも合わせるように努力する
・メーリングリストや電子掲示板を利用する
・ｅメールで質問がきたら、学生の名前は伏せて全員に答える
・自分の研究内容について話す
・学生が興味のありそうな学外の活動を紹介する
・学生が自分の考え方を述べたりディスカッションに参加することをすすめる
・ワン・ミニット・ペーパーを使って学生からフィードバックをとる
・メールでのディスカッショングループをつくる

２．学生間で協力する機会を増やす

・お互いファーストネームで呼ぶようにする
・学生に自己紹介をさせる
・学生間で今興味のあることや過去の経験などを話させる
・授業の予習や試験勉強をクラスメイトと一緒に行うことをすすめる
・難しい概念を学生間で説明させる
・学生間で完成した課題の良かった点を指摘させあう
・重要な概念について学習歴や考え方の異なる学生間で議論させる
・出身や文化の異なる学生で作業グループを作る
・学生に学内のサークルや委員会に一つ以上所属するようにすすめる
・他の学生に教えることが自分の成績を下げることにつながらないことを伝える
・学生間でそれぞれの課題の批判、添削、評価を行わせる
・少人数で予備ディスカッションをしてからディスカッションを行なう
・授業時間の内外で共同で行う課題を出す

・グループのメンバーをときどき入れ替える
・チューターセンターやピアサポーターを訪問・活用させる
・メールや電子掲示板などのコミュニケーションツールを使う
・多人数の授業でもお互いに学ぶ機会を設ける
・共同作業の最中はなるべく学生に任せる
・学生が提出したレポートや成果物をクラスの学生で共有する
・グループ活動は自発性に任せずに教員が設計する
・学生間で考え方を共有することが大事であると伝える
・学生の質問には個人的に応えずに全員に答える
・初回の授業では学生がお互いを知り合える活動を取り入れる
・試験前や課題提出前にはグループで勉強するように呼びかける
・学生がお互いに信頼し尊敬できるように励ます
・初回の授業で学生がお互いに持っている問題意識を質問しあう
・電子掲示板はグループ専用のものを用意してあげる
・グループディスカッションでは人物ではなく意見を批判するように伝える
・前の学期の学生がグループで話していたことを今の学生に伝える

3．能動的に学習させる手法を使う

・学生に授業に期待することを述べさせる
・学んだことを他の学生に教えさせる
・授業のはじめに問題提起をして授業に臨む準備を促す
・授業の中で学生の成果を共有させる
・異なる理論家、研究成果、芸術作品の共通点と相違点を学生にまとめさせる
・学生に授業外の事例を授業の内容と関連させる
・学生に研究活動や個別学習をさせる
・教師の考え、他の学生の考え、教材などに書かれている考えに対して批判的になることをすすめる
・授業の中でシミュレーションやロールプレイの方法を使う
・新しい参考文献、研究プロジェクト、フィールドワークなどを学生が提案することを促す
・授業の内容に応じたフィールドワーク、ボランティア活動、インターンシップなどを紹介する
・学生と共同で研究プロジェクトをすすめる
・実験・臨床の機会を増やす
・授業中に書く活動、書いたものを校正する活動を行う
・課題についての記録を書かせて教員と意見交換をする
・授業中に実際に問題を解かせる
・新しい科目の開設を検討する際に学生に参加させる
・教員の研究の補助をする機会を与える

・数人のグループで問題解決活動を行い、授業ではグループ間で議論させる
・実社会の問題解決につながるような課題を設定する
・一週間・一学期間で最低限交換すべきメールの数を決めておく
・ウェブで入手できるフリーのゲーム、シミュレーションを活用する
・授業の内容がこの後受ける授業でどのような意味を持つかを説明する
・懸賞論文等の課外の活動への参加をすすめる
・授業の内容やの進め方について学生と相談して決める
・学生に文献の読み方を教える
・授業ではすべての学生に発言する機会を与える
・他の学生の課題に対して批判的にコメントさせる
・ディスカッションやシミュレーションの後にはフォローアップの文献を読ませる

４．素早いフィードバックを与える

・頻繁に小テストや課題をすることで、学生の進捗状況をチェックする
・授業内で学生に課題をさせることで、学生にすばやいフィードバックを与える
・試験の答案やレポートを1週間以内に返却する
・学期の早い内に、学生の成果に対して細かなフィードバックをする
・学生と進捗状況について話すための日程調整をする
・試験やレポートなどのよかった点と改善したほうがよい点をコメントする
・授業の初めのうちに、学生の能力をチェックする
・学生に授業や自分の進捗状況に関する記録を残させる
・期末テストの結果について話し合うことができることを伝える
・授業を欠席した学生に電話をしたり、伝言したり、メールする
・毎回の授業前に課題を課す
・試験が終わった直後にフィードバックとレビューをする
・学生を一緒に課題にあたらせる
・学生に自己評価をさせる
・中間試験をする
・クラスの平均的な学生の理解度を知る
・クラス内で編集作業をする
・学生に授業中に自分の考えを意見させる
・文章のドラフトをまず書かせる
・レポートのドラフトに対してフィードバックを与える
・多くの練習と課題を用意する
・試験では使用しないサンプルテストを与える
・できるだけほめ、建設的な批判をする。
・授業に関する記録を残させる
・質疑応答の時間をつくる

・小さな人数のグループ学習をとりいれる
・授業の中で課題の成果について話す
・オフィスアワーで個別にフィードバックを行なう
・自動的な返信メールなどで学生に課題が提出されたことを伝える
・課題はある一定の期間内に返却されることを伝える
・成績の基準を学生に明確に示し、それにそって成績評価する
・学生に研究会に出席することをすすめる
・学生からのフィードバックに合わせて、学期中に授業内容や方法を調整する
・学期を通じて定期的に簡単なフィードバックを与える
・学期を通じて最低１回は明確かつ詳細なフィードバックを与える
・学生による授業評価に合わせて、次の学期の授業内容や方法を修正する
・授業に同僚に来てもらい、教え方について話し合う
・学期中に１回の授業をビデオテープに録画し、授業を検討する
・授業の録音もしくは録画をする
・学生に授業で学んだことを５分間で書かせる
・学生にレポートを２部提出させて、一部は学生に相互評価させる
・優れた学生の成果を紹介し、なぜ優れているのかを説明する
・学生に何を期待しているのかをしめすために課題の解答見本をしめす。
・授業の初めと最後にテストをする

５．学習に要する時間の大切さを強調する

・学生に出された課題にすぐに取り組むように伝える
・学生に課題を出すときに最低どれくらいの時間をかけなければならないかを伝える
・複雑なことを理解させるときに、説明に要する時間を先に伝える
・学生が意欲的な目標を設定できるように支援する
・学生がプレゼンテーションをするときは、前もってリハーサルをさせる
・学生に欠席するとどのような結果を招くおそれがあるかを伝える
・フルタイムの学生であることは、フルタイムの労働者と同じ時間の学習が必要であることを伝える
・学習習慣や、時間管理などでうまく行かない学生には個別に会って話をする
・学生が授業を欠席した時は、追いつくための学習が必要であることを伝える
・授業で一定時間内に書く機会を設ける
・ディスカッションの際には時間を設定する
・授業は時間通りに始めて時間通りに終わる
・授業中はできる限り集中しなさいと伝える
・課題を出す時は期限も同時にしめす
・宿題の重要性を強調する
・学生が学習時間を有効に使えるように宿題や課題を明確に指示する

・学生が効率的に学習できるように教員と学生、または学生間でコンタクトを持つ機会を増やす
・重要な文献はあらかじめ教材として用意しておく
・パートタイムの学生には特にワークショップや集中講義などへの参加を呼びかける
・コースの開始時に学生に求める学習の全体像を提示する
・レディネスに関するアンケートを行い、結果をすぐに提示する
・授業の内容が実社会のどのような面で役に立つかを提示する
・学生への課題に要する時間を計算し、現実的に行える学習時間に合うように調整する
・大きな課題の締切には段階的な締切をいくつか設定する
・一回の授業にはどれだけの時間外学習が必要かを伝える
・課題をするときには質を落とさずにできるだけ短い時間でやるように学生に言う
・教科書のみを勉強しすぎないように指導する
・授業中に板書を正確に写すことだけが重要ではないことを伝える
・予定を立てるときに綿密すぎる予定のたて方をしないように指導する
・大量の暗記をすることだけが学習ではないことを伝える
・計算に電卓を使うことは悪いことではないことを伝える
・学生にレポートなどの筆記課題は提出する前に校正をするように指導する
・授業内容についていけない時は教員に相談するように伝える
・学生にはコースの内容を理解するのに必要な学習時間を明確に伝える
・レポート課題を出すときには、何回も校正することを求める
・授業時間外の学習活動を行わせるときに、他の教員が授業で課している時間外学習課題について把握する
・学生向けのタイムマネジメントセミナーに参加させる
・課題を完成させるために行う学習活動の手順をしめす

６．学生に高い期待を伝える

・授業で学生に一生懸命勉強してほしいということを伝える
・成績を高い水準で維持することが重要であることを授業で強調する
・毎回の授業の始めにその日の授業で期待することを口頭で伝え板書する
・自ら意欲的な目標を設定する学生をほめる
・期限までに課題を出さなかった場合にどのような対応をするかを説明する
・発展的な学習を求める学生のために、追加の文献や課題を提供する
・学生にたくさん書くようにすすめる
・優れた成果を出した学生には全員の前でほめる
・学期中に定期的に授業がうまくいっているかを議論する
・学生に時間を守るように伝える

・レポートなど提出物に不十分な点があれば書き直しをさせる
・シラバスで授業の目標を明確にしめす
・学生に高い成果を期待していることを伝え、その具体例をしめす
・学生の能力を超えない範囲でより努力するように常に励ます
・学生に期待する理想的な学習計画を参考として提供する
・授業前に教科書を読む、宿題を終える、質問を用意するなどの準備をしてくるよう伝える
・学生の最終成果をウェブで公開する
・最終成果の評価基準とともに、優、良、可のレポート例をしめす
・成績評価の基準を学生に示して学生と合意する
・授業の内容には多少意欲的に取り組まなければ達成できない課題を用意しておく
・高い水準に到達できない学生には個別指導を行う
・学生に成績よりも最善の努力を尽くすことの方が重要であると学生に言う
・どうしても内発的に動機づけられない学生には、表彰したり報償を与える
・教材が系統的にまとめられて示されると学生の学習意欲が向上する
・学生のレディネスと学生の学習方法についてしっかりと把握する
・学生は学習にあたって不安があることを理解し、授業では深刻な不安を作らないように配慮する
・学生を学会や研究会のメンバーに参加させる
・学生間で協力して目標を立てる機会を設ける
・学生が課題を完全に達成したら感謝の意をしめす
・アルバイト等による言い訳を一切聞かない
・必須の課題以外の課題を用意しておいてそれらを行うことをすすめる
・学生をほめる時は大勢の前だけでなく個別にもほめる
・学生が期限までに課題を終えられなかった時には説明を求める
・シラバスには課題、課題の期限、課題の評価基準を書く

7．多様な才能と学習方法を尊重する

・わからないときはわからないと言うことを学生にすすめる
・他人を傷つけるような皮肉や冗談を慎むようにする
・多様な学生に合わせて多様な教授法を使う
・学生のバックグラウンドにあった教材を使う
・基本的な知識やスキルが身についていない学生には、追加の教材や練習問題を与える
・授業の中に少数グループの視点を取り入れる
・個別学習を求める学生にはその機会を提供する
・コースの初めに学生の学習スタイル、興味、バックグラウンドを知る
・授業の中にビデオ、ディスカッション、講義、グループ学習、相互学習などの

多様な学習活動を用意する
・論理的な判断力が得意な学生もいれば、直感的な創造力が得意な学生もいることを理解する
・メールや電子掲示板の活用をすすめる
・視覚や聴覚などの補助器具などの便宜をはかる
・書かせたり、話させたり、プロジェクトをしたりと評価を多様にする
・オンライン教材によって、それぞれのスピードで学習させる
・履修する学生に、対面型の講義と教科書による授業、コンピュータを使った講義と教科書による授業などの選択肢を与える
・教室を出てフィールドワークを行う
・一回の授業の中で多様な学習活動を含める
・異なるバックグラウンドをもった学生の意見を授業内で共有する
・学生間で協同学習をさせる
・学生の異なるバックグラウンドや興味について理解する
・学生に自分の考えを発言することをすすめる
・学生に他の学生に対して尊敬することの重要さを伝える
・差別的発言や攻撃的な言動は慎ませる
・どの学生にとっても安心して学習できる環境を提供する
・学生の持っている長所を活かして教える方法を見つける
・学生の学習の進捗状況を知るために、何度かそして多様な方法で評価する
・さまざまな知能を認め、お互いに補い合うことが大事と主張するハワード・ガードナーの研究成果に精通する

４．おわりに

本稿では、米国で開発された「優れた授業実践のための７つの原則」の開発とこれまでの成果と「７つの原則」を具体化する実践手法のリストとその特徴を明らかにしてきた。そこで明らかになったことをまとめると以下のようになる。

・米国高等教育学会の研究グループを中心に開発された「７つの原則」は、これまでの教授法研究の成果が教員にとって利用しやすい形でまとめられているため、全米の大学に広く普及している。
・「７つの原則」に対応する実践手法は、大学等においてウェブ上にまとめられている。その実践手法の内容から、現場レベルで多様化された形で蓄積されていることが確認された。

・「７つの原則」の実践手法を収集することによって、どの学問分野の授業においても実践できるような手法が相当量存在することが確認された。
・抽出した原則別の実践手法の数は、27個(多様な才能と学習方法を尊重する)から44個(素早いフィードバックを与える)の範囲においてばらつきがある。７つの原則が実践手法を束ねる枠組みとして比較的バランスのよいものであることが確認された。
・「学生の自己紹介」や「オフィスアワーの設置」など１つの実践手法が複数の教授法の原則に対応する場合があることが確認された。
・実践手法の中には、学生に対してメンターやアドバイザーとして接するような行動が含まれている。単なる知識伝達者としての狭義の教師像ではない広く学生の発達に関与する教師像が反映されている。

このような「７つの原則」は、日本の大学の授業の現場ではどのような意味を持つのだろうか。米国において開発された「７つの原則」は、あらゆる学問分野の教員が利用可能なことをコンセプトとして作成された。また、アメリカでの広がりを見る限り、さまざまなタイプの大学において有効であったとも推測できる。このような学問分野や大学の属性を超えた教授法の原則は、はたして国境をも越えることができるのであろうか。

この問題に答えるには実証的な研究が必要である。日本の大学には独自の学生像や教師像、授業文化などがあるため、慎重に検討する必要があるだろう。しかし、日本の大学のニーズに適した「優れた授業実践のための原則と実践手法」を作成するにあたって、「７つの原則」の経験を踏まえることは有益であろうと考えられる。次の課題としたい。

注

１）たとえば、2004年９月30日に名古屋大学教養教育院で実施されたFDでは、学生をほめることの重要性が指摘されたが、全体会の後の分科会ではどのように学生をほめたらいいのかという具体的な実践的手法について質問提起があり議論となった。
２）『成長するティップス先生』の有効性は、名古屋大学高等教育研究センター(2002)においてアクセス数と反響からまとめられている。
３）中井ら(2002)によると、『成長するティプス先生』の課題として具体的な

例が不十分であることが指摘されている。

４）７つの原則は、その反響の大きさから発表直後に小冊子にまとめられて出版されたが、この冊子は、全米をはじめ英国やカナダの大学関係者の間で１年半のうちに15万冊の注文があったとされている（Gamson, 1991, p. 8）。また、89年に発表した教員・高等教育機関向けチェックリストも、１週間で４万部、合計で50万部以上の小冊子が販売されたとされている（Gamson, 1991, p. 10）。７つの原則の発表直後に行われた調査では、７つの原則を大学のFDワークショップなどで活用している大学は約54%に上ることが示されている（Poulsen, 1991, p. 30）。インターネット上においても、７つの原則に関連するウェブサイトは多い。2004年11月現在で、検索エンジンGoogleを用いて“Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education”をフレーズ検索した結果、約7400サイト存在していることが確認される。

５）たとえばSorcinelli（1991）は、７つの原則の有効性検証に関するレビューをまとめている。またPoulsen（1991）は、７つの原則の各大学における活用状況の調査をまとめている。

資料１　実践手法のウェブサイト

Gonzaga University (1999) Institute for Law School Teaching: Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education. Retrieved October 4, 2004, from http://law.gonzaga.edu/ilst/7PsIntro.htm

Howard Community College (2004) Director of Distance Education: Principles of Best Practice in the Design and Delivery of Online Education at Howard Community College. Retrieved October 4, 2004, from http://www.savstate.edu/ctlas/ats/webct/vista/Principles.htm

Jones, K. (2001) College of Saint Benedict Saint John's University: Learning Enhancement Service: Best Practice. Retrieved October 4, 2004, from http://www.csbsju.edu/les/pastevents/best_practices.htm

Michigan State University (2004) Applying The Seven Principles For Good Practice in Undergraduate Education. Retrieved October 4, 2004, from http://www.msu.edu/user/coddejos/seven.htm

Panitz, T. (2004) Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education Implementation Ideas, Retrieved October 4, 2004, from http://home.capecod.net/~tpanitz/7ideas.htm

The University of Florida (2002) Seven Principles of Good Practice: A Feeds Evaluation. Retrieved October 4, 2004, from http://www.unf.edu/dept/cirt/teaching/7principles.pdf

University of Missouri-Rolla (2001) Ad hoc Mentoring Committee: Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education. Retrieved October 4, 2004, from http://campus.umr.edu/lead/7principles/MentoringCommReport.htm

Walker, G. (1998) Teaching Resource Center of The University of Tennessee at Chattanooga: Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education. Retrieved October 4, 2004, from http://www.utc.edu / Administration / WalkerTeachingResourceCenter / FacultyDevelopment/7principles.html

Wayne State University (2004) Teaching Matters, The Office for Teaching and Learning Newsletter, Vol.8, No.7. Retrieved October 4, 2004, from http://www.otl.wayne.edu/pdf/newsltr/apr04.pdf

Winona State University (2001) A Message from the President: Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education. Retrieved October 4, 2004, from http://www.winona.edu/president/index.htm

参考文献

池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹(2001)『成長するティップス先生－授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部

中井俊樹・首藤貴子(2002)「インターネット上での反響」名古屋大学高等教育研究センター『「成長するティップス先生」の記録2001.04－2002.03』平成13年度名古屋大学教育改善推進費プロジェクト報告書、名古屋大学、pp.11-18.

名古屋大学高等教育研究センター(2002)『「成長するティップス先生」の記録2001.04-2002.03』平成13年度名古屋大学教育改善推進費プロジェクト報告書、名古屋大学

日本数学会・大学数学基礎教育WG教授法研究班(2000)『大学での数学の教え方いろいろ－1998年５月のアンケート調査結果のまとめ』

Astin, A. (1984) Student Involvement: A Developmental Theory for Higher Education, *Journal of College Student Personnel*, No. 25, pp. 297-308.

Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education, *AAHE Bulletin,* March 1987, a publication of the American Association of Higher Education.

Feldman, K. (1997) Identifying Exemplary Teachers and Teaching: Evidence from Student Ratings in Perry, P. and Smart, J. (Eds.), *Effective Teaching in Higher Education: Research and Practice*, Agathon

Press.
Gamson, Z. (1991) A Brief History of the Sven Principles for Good Practice in Undergraduate Education, *New Directions for Teaching and Learning*, No. 47, pp. 5-12.
Poulsen, S. (1991) Making the Best Use of the Seven Principles and the Faculty and Institutional Inventories, *New Directions for Teaching and Learning*, No. 47, pp. 27-35.
Sorcinelli, M. (1991) Research Findings on the Seven principles, *New Directions for Teaching and Learning*, No. 47, pp. 13-25.